我が校の働き方改革
～部活動の代替案 放課後教室『学びま専科』の実践を通して～

一宮町立一宮小学校校長　永野（ながの）　真仁（まさと）

1　はじめに

話は令和元年、コロナ禍前に遡る。実効性のある「働き方改革」を行うためには、小学校における各種大会、部活動の見直しが必須であるとの考えから、長生郡市校長会の諮問機関として「行事検討委員会」なるものが組織された。当時の長生地区小学校では、陸上競技大会をはじめ、水泳、ミニバス、サッカー、体操、ダンス、音楽発表会が実施され、加熱の一途を辿っていたこともあり、本当に改革が進むものかと疑問視する声もあった。

委員会では、小学校における各種大会のあり方について数回にわたり議論を重ね、要望書としてまとめたものを全校長で内容（陸上と音楽会以外は廃止）を確認した。これを校長会長の名前で長生小中体連をはじめ関係団体に提出した。その後は紆余曲折があり、ここに来てようやく各種大会、発表会のあり方も見直され、廃止、規模縮小が進んできた。

2　代替構想について

当時、校長会長からは、「我々の代が矢面に立って改革を……。」との発言があったが、実際は、その後に残された我々こそ矢面だと考えていた。なぜなら、我々の目の前には子供たちと保護者の存在があり、簡単にバッサリと切るわけにもいかないからである。報道等を通じて、職場としての学校のブラックな部分が世間一般に知られるようになった。しかし、「働き方改革」という言葉で全てを切り捨てるのは到底理解が得られるものではない。事実、大会が廃止となっても、部活動の存続を望む声は多く、容易ではないと感じた。

そこで、本校では、段階を踏むためにも、部活動廃止後の代替構想について次のような内容で、「学校だより」を通して示していった。

部活動の廃止により、これまで練習に充てていた放課後の時間の使い方について次のような構想を練っている。

文科省からは、小学校高学年において、今後、教科担任制の導入が打ち出されている。本校では、これまでにも教員の教科・領域における専門性を生かして、学年内を中心に交換授業を実施し、中学校の教科担任制へのスムーズな移行を目指してきた。全学年が３学級あり、本地区では比較的規模の大きい学校だからこそできる工夫である。

さらに、週２回程度、対象は高学年児童の予定であるが、子供たちの興味・関心、幅広いニーズに応えて様々な放課後教室のコマを組み、自由に発展的な課外授業が受けられるように整えていく。ここでも担任以外の教員との関わりを意図的に持たせることで、いわばプレ教科担任制を体験させることができるものと考える。

上記のように「働き方改革」というワードには敢えて触れず、「子供たちと向き合う時間の確保」と、「教科担任制の準備」を前面に打ち出し、説明を重ねてきた。

そして、コロナの影響で当初の計画から１年遅れとなった令和４年６月、５・６年生を対象に週２日、「算数」、「造形」、「ダンス」、

「プログラミング」、「金管楽器」、「スポーツ」の６教室から２教室を選択できるシステムで放課後教室『学びま専科』をスタートさせた。これに合わせて、既存の水泳、ミニバス、サッカー、体操、金管の部活動を廃止した。

この取組が、「部活動から専科へ」と題して、千葉日報の一面トップ記事となり、総セをはじめ、学校、地教委等から多くの問い合わせをいただくなどの反響があった。

しかし、『学びま専科』をスタートさせたことで、教員の新たな負担を生んだのでは本末転倒である。スタート段階の６教室については見直しを図り、令和５年度の『学びま専科』は、２教室を減じて、「算数」、「ダンス」、「プログラミング」、「自由遊び」の４教室とした。また、コロナ禍明けとなり様々な学校行事が復活する中、放課後の時間帯は行事の準備に駆り出される児童も多く、『学びま専科』の実施期間については秋季運動会の準備が始まる前に終了とし、負担軽減を図った。

３　今後の方向性

本校の喫緊の課題は学力向上である。それも、実効性のある取組とするため、次の２点について推進している。本年度より、学校全体の研究教科を「算数」とし、子供たちにとって「わかる喜び」や「学ぶ楽しさ」が味わえるような指導の工夫について、授業実践による検証を重ねていく。このことにより、教員の確実な指導力向上を目指すものである。

また、中・高の免許をもつ教員や、長期研修生として、総セや大学等で専門性を高めた経験のある教員も多く配置されている。そんな、個々の教員の専門性を最大限に生かした交換授業（専科授業を含む）を積極的に取り入れていくため、学年内のみならず、学年を越えた縦割りの交換授業を積極的に取り入れるようにした。つまりは、「教科担任制の準備」がまた一歩進んだものと考える。

このタイミングに合わせて『学びま専科』は、教室数の削減、期間の短縮を図った。今後の方向としては、「教科担任制の準備」が整うにつれ、『学びま専科』は縮小、廃止に向かうことを想定している。

また、当然のことのように地域行事への参加を求められてきた伝統のマーチングバンドは、長らく活動もなく、ベースとなる金管部の廃止により存続が不可能となった。コロナ禍前は、多くの授業時数を割き、夏休みにも子供たちを集めて練習してきた。地域行事への参加意義を否定するものではないが、授業時数の確保は最優先としたい。今後は、正課音楽の時間内で、無理なく取り組んだ合奏や合唱での参加に向け調整を図る予定である。

４　おわりに

令和５年８月には、中教審の緊急提言がなされ、教員の働き方をめぐり、危機的な状況にあるとし、地域への業務分担や教科担任制実施の前倒しについても盛り込まれた。

長生地区では、話題とすることがタブーとされた各種大会の在り方に初めてメスを入れた。本校では、この機を逃さず部活動の廃止に踏み切り、職員は、部活動の無い毎日を過ごしている。本来、「働き方改革」について保護者、地域の理解が深まり、協力のもと進めることこそが理想的な形であろう。しかし、待ったなしの状況にあった本校では、代替プランを示し、部活動を廃止したことで、一定の成果を挙げている。まだまだ完成形とは言えない体制ではあるが、今後も、子供たちと向き合う時間を確保し、豊かな学びを保障するためチーム一宮、知恵を出し合い、より良い方向性を見出してくれるものと期待する。